

高等学校「世界史」の「主題を設定し追究する」学習（3）

— 「現代の世界」の場合 —

森 才 三

通史的な系統学習を補完するものとされてきた「世界史」主題学習は、1999年の学習指導要領の改訂により、「世界史B」では学習計画の全体の中で導入部と終結部に位置づけられ、それぞれの位置づけに応じた目標と内容が示された。本稿では、先稿の「世界史B」の導入部「世界史の扉」の単元に続き、終結部「現代の世界」の単元の「主題を設定し追究する」学習の教材を開発し、それを教授書の形で提示する。追究すべく取り上げた主題は「アメリの『愛国心』」であり、「(歴史)認識をふかめる」という終結部での主題学習のねらいを実現するため、小単元は「現在の認識」「過去の解明」「未来の展望」という現代史学習の三つの学習段階により構成する。

I 問題関心の所在

筆者は、先に、学習指導要領における高等学校世界史の主題学習について検討し、それを「高等学校『世界史』の『主題を設定し追究する』の学習(1)・(2)」¹⁾にまとめた。その(1)では、これまでの指導要領における高等学校世界史の主題学習の変遷を整理しながら、1999年改訂の学習指導要領(以下、99年版と略記する)における「主題を設定し追究する」学習の含意を解明し、その(2)では「世界史B」の導入部「世界史の扉」の単元における主題学習の教材開発を行った。本稿では、そうした一連の研究を受けて、「世界史B」の終結部「現代の世界」の単元の主題学習の教材開発を試み、あわせて現代史学習の意義についても、すこしく考察を加えたい。

II 現代史学習の意義とそのあり方

99年版では、「世界史B」の終結部「現代の世界」の単元の内容は、「内容」の大項目(5)で示されている。大項目(5)は6つの中項目(ア～カ)で構成されているが、中項目(ア～ウ)が「～を扱い、～を理解させる」となっているのに対し、中項目(エ～カ)は「～を追究し、～を考察する」あるいは「～を追究し、～を展望する」となっており、中項目(エ～カ)で「主題を設定し追究する」学習が想定されていることがわかる。さらに、「内容の取り扱い」では、「例示された課題などを参考に適切な主題を設定し、生徒の主体的な追究を通して認識を深めさせる」と説明されている。中項目(エ～カ)は、以下の通りである。

エ 国際対立と国際協調

オ 科学技術の発達と現代文明

カ これからの世界と日本

「世界史B」の終結部の「現代の世界」は、所謂

「現代史」の単元である。現代史とは、ふつう、第一次世界大戦から私たちが生きている「今」までの時代をさしているが、それを学習する意義はどこにあるのだろうか、また、その授業はどのように構成すればよいのであろうか。

筆者は、かつて、それらのことについて考察し、現代史の三つの特性を指摘し、問題史的な現代史学習の授業構成を提起した²⁾。現代史の三つの特性とは、《同時性》《未完結性》《逆理性》である。

《同時性》とは、私たち自身が当事者として結びついている行為が遂行されるのと「同時的」に、現代史は形成されるということである。また、《未完結性》とは、現代史の出来事は経過的で、その歴史の形成は現在進行形であり、それ故、その叙述は未完結であるということを示している。そして、未完結であるということは未来の契機を含むということであるから、現代史は過去へ没入しながらも過去から離脱するという逆説的な二面性を有していることになる。それが《逆理性》である。

また、現代史の《同時性》は、「今、ここ」に生きる私たちは現代史の一部分をなし、歴史を作り出しているということも意味している。しかし、私たちにはそうした自覚はない。私たちは、私たちを超えた力に巻き込まれ、それとも知らずに生きているというのが実際である。現代史を学習する意義の一つは、私たちが生かされている「今、ここ」のポジションが何であるのか、その歴史的な文脈を確認することにある。

さらに、《未完結性》と《逆理性》の特性が指摘される現代史は、歴史認識と同時に未来に対する選択という判断から逃れることはできない。「判断」は「認識」以上に価値の領域に入り込むものであるが、現代史を学習する二つ目の意義はそこにこそあ

る。すなわち、未来への変化の契機を意識して解説し、未来を展望する地平を拓く、ということである。このように、現代史を学習する意義は、私たちが生かされている「今、ここ」のポジションが何であるのか、その歴史的文脈を確認するとともに、未来を展望する地平を拓くことにあるといえよう。

以上のことから、現代史学習は、「現在を認識」するために、「過去を解明」し、「未来を展望」するものである、と説明することができよう。したがって、その学習は、「現在の認識」「過去の解明」「未来の展望」の三つの学習段階によって構成される。99年版で示された「世界史B」の終結部の主題学習は、「～を追究させ、～を考察(展望)させる」、「生徒の主体的な追究を通して認識を深めさせる」というふうに説明されているが、それらは、このような現代史学習の三段階により授業を構成することで実現されよう。本稿で提示する教材も、これによって小単元を構成する。

III 追究する主題の設定

「世界史B」の終結部の主題学習で追究させる内容、考察(展望)させる事柄として、次表のものがあげられている。

	追究させる内容	考察(展望)させる事柄
エ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 核兵器問題 ○ 人権・民族問題、 ○ 第二次世界大戦後の主要な国際紛争 	国際協調の意義と課題
オ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 情報化 ○ 先端技術の発達 ○ 環境問題 	科学技術と現代文明
カ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国際政治、世界経済、現代文明などにおいて人類の当面する課題 	これからの世界と日本

本稿では、これらの中項目の中から、主として中項目(カ)に注目して、「国際政治において人類の当面する課題」を取り上げ、「これからの世界と日本」を展望させるような具体的な主題を設定する。追究すべく設定した主題は「愛国心」であり、具体的には、近年の地域紛争におけるアメリカの人道的介入からアメリカ外交の原則を読み取り、アメリカの「愛国心」の由来とその構造を解明するとともに、「愛国心」について考察を深めようとするものである。そうした主題の設定は、以下の(1)・(2)のような筆者の社会科教育観と現代社会認識に基づいている。

(1) いま、何が社会科教育に求められているか

現在、個人や国家が勝者と敗者に分断される《社会や世界の分断化》³⁾が進行しているといわれている。《社会や世界の分断化》は、ただ単に両者の格差が拡大し、不平等が増大しているということの意味しているのではない。《分断化された社会や世界》では、公共性へのアクセスは非対称で、敗者がキャッチアップすることはほとんど不可能である。敗者となることは社会から否定されたも等しく、敗者は見棄てられ、存在するということが忘れられる。《分断化された社会や世界》の問題点は、そこにある。そのような《分断化された社会や世界》においては、もはや、言説の力によって合意を形成し、秩序を維持することは困難である。

こうした《社会や世界の分断化》の現実を考えると、「社会科教育はそれをめざすのか、否か」という社会科教育目標論の本質論的な論議はさておき、たちまち社会科教育に求められているのは、「他者を想像する力を育て、その射程を広げる」こと⁴⁾ではないだろうか。

(2) いかに、公共性の空間を統合するか

《社会や世界の分断化》は公共性の空間の統合を危うくするものであるが、昨今、世界のあちこちで目につくようになった「愛国心」を強調する動きは、《社会や世界の分断化》をさらに進めるものとして危惧される。「愛国心」の強調は共同体としての国家の統合を促す。しかし、それは自国内の均一化と自国を他国から区別する特殊化を進めるもので、内部の異質な他者は排除され、外部の他者との境界線は強化される。「愛国心」の強調によって統合される共同体では、同化と排除の機制が機能し、共同体は閉じたものとなる。

「愛国心」の強調は、内外の他者へのまなざしを失わせ、他者を想像することを妨げてしまうことになりはしないだろうか。私たちが他者に対してどのようにふるまうかは、私たちが他者をどのように想像するかによって決まる。他者へのまなざしを失っては、他者を想像することはできない。閉じた共同体は「愛国心」によって統合されるが、誰もがアクセスできる、開かれた公共性の空間の統合は、「他者を想像する」ことによって可能となるのである。

IV 教材構成の視点

愛国心を辞書的に説明すると、「人が自分の帰属する親密な共同体、地域、社会に対して抱く愛着や忠誠の意識と行動」というふうになる。愛国心の対象は生活世界の全体であり、愛国心のあらわれ方も、懐かしさ、親近感、郷愁というような感情か

ら、対象への熱狂的な献身まで、大きな幅がある。しかし、ナショナリズムが形成されると、愛国心の対象として国家が優先的に大きな比重を占めるようになり、国民国家への愛着と忠誠が「愛国心」とされるようになる。アーネスト・ゲルナーは、ナショナリズムを「きわめて特殊な種類の愛国主義」とし、「近代世界でしか優勢とならない特定の条件の下でのみ普及し支配的となる」と述べている⁵⁾が、本稿で取り上げる「愛国心」は、このような近代の国民国家への感情としてのナショナリズムである。

本稿で提示する小单元「アメリカの『愛国心』」は、具体的には、次のように構成されている⁶⁾。

パート(1)：国際社会におけるアメリカの役割とアメリカ外交の基本原則

パート(2)：「理念」を掲げる「移民の国」アメリカ

パート(3)：アメリカの「愛国心」

パート(1)では、「なぜ、アメリカは地域紛争に介入するのか？」という問いをメイン・クエスチョンに、旧ユーゴスラビアに起こった紛争に対するアメリカの対応を事例として取り上げ、現代国際社会における秩序維持の方法、国際社会におけるアメリカの役割、アメリカ外交の基本原則を解明する。そして、終結部では、パート(1)での学習の応用として、解明された知識を使って現代世界の事象を説明させる場面も設定する。また、パート(2)では、「なぜ、アメリカは普遍的な価値を重視するのか？」という問いをメイン・クエスチョンに、その理由を、「移民の国」アメリカの国民統合の仕方という視点から、アメリカの歴史を辿りながら解明する。さらに、パート(3)では、「なぜ、アメリカ人は、普遍的な価値を世界に実現しようとするアメリカという国を支持するのか？」という問いを切り込み口に、アメリカの「愛国心」の構造を解明し、人の心に「愛国心」が生まれる理由を考察する。そして最後に、それらを手がかりとして、現代世界のいろいろな国に見られる「愛国心」の読み解きを試みる。

小单元の各パートは、「現在の認識」→「過去の解明」→「未来の展望」というふうになっており、3時間の時間配当を考えている。しかし、パート(1)・(3)では、それぞれの終結部の最後に、そのパートで学習した知識をもとに、何か適当な現代世界の事象を取り上げて説明させる応用場面を設定することも考えられる。

(1) 国際社会におけるアメリカの役割とアメリカ外交の基本原則

ソ連の崩壊によって世界の大きな対立は終わった。しかし、世界各地で地域紛争が噴出している。それらを観察すると、次のような現代の世界システムを読み取ること⁷⁾ができる。

- ① 人権思想の一層の普遍化（内政不干涉原則の適用除外事例の拡大）
- ② 国際社会における公共性を実現する手段や制度の多元性・重複性
- ③ アメリカの決定的な役割

つまり、近年の地域紛争のいくつかにおいては、深刻な人権侵害に対する人道的介入が、内政不干涉原則に優先して行われ、国連をはじめとする公共性を実現する様々な枠組みによって、それは正当化され、アメリカを中心に実行されている、ということである。ソ連の崩壊後の世界秩序の実現は、アメリカに大きく依存しているわけであるが、国際社会において、アメリカはどんな原則にしたがって、その役割を果たそうとしているのだろうか。

アメリカは世界の警察部隊ではなく、世界中のすべての地域への関与を均等に想定しているわけではない。アメリカの「傲慢と無関心」に警告を発し、アメリカの国力としての「ソフト・パワー」を説いているジョセフ・S.ナイは、アメリカが真摯に追求すべき戦略として、次の三つをあげている⁸⁾。

- (1) 国の存続を守る戦略
- (2) 世界的な公共財を提供する戦略
- (3) 民主主義と人権の価値観の普及する戦略

つまり、国の存続を守ること、世界的な公共財を提供すること、人権と民主主義の価値観を普及させること、の三つをアメリカの「国益」と考えているのである。ジョセフ・ナイは、アメリカの「国益」を、ただ自国の利益という狭い観点からではなく、他国の人たちの利益をも視野に入れた世界の利益としてとらえ、さらに遠い将来にわたる利益という観点から、幅広くとらえていることがわかる。ジョセフ・ナイが指摘するこれらの三つの「国益」とそれらを実現する三つの外交戦略から、アメリカ外交の基本原則として、次の三つを導出することができよう。

A 国益(狭義)	B 世界の利益	C 人道的利益
----------	---------	---------

これらはどれが優先するというものではなく、三つの方向性を示すもので、その時時の国際社会の現実の問題を前に、理想主義と現実主義、単独主義と多国間主義の間で融合され、アメリカの外交政策が決定され実行に移されていくのである。旧ユーゴスラビアのボスニア紛争やコソボ紛争においても、そうした外交原則を確認することができる。パート(1)では、旧ユーゴスラビアの紛争を事例として、アメリカ外交の基本原則を解明し、それらをイラク戦争

の説明に応用することによって「現在の認識」を深めたい。

(2) 「理念」を掲げる「移民の国」アメリカ

アメリカ外交の方向性を示す三つの原則の一角に、世界の利益や人道的利益が確固として位置づけられるということは、アメリカという国のありようと深く関係している。国のありようは、その国の成立・形成と関係している。アメリカが民主主義と人権を普遍的な価値として重視し、それを世界に実現しようとする国であるということは、アメリカという国の成立・形成と深くかかわっているのである。アメリカは、多様な人種や民族からなる「移民の国」であり、「多様性の中の統一」ということが国の本質的課題であった。国民を統合する原理は、エスニックな一体性に求めることはできないし、固有の土地やそれと不可分な伝統や歴史に立脚することもできない。

ネイションのとらえ方には、フランスのルナンのように、ネイションを共通の過去を担い共同の生活を継続しようという意思と合意によって結ばれた政治共同体と捉えるもの(《フランス・モデル》)と、ドイツのフィヒテの場合に典型的に見られるように、運命的に決定された出自・言語・文化の共通性に立脚した原初的共同体と捉えるもの(《ドイツ・モデル》)の二流がある⁹⁾。国民は、《フランス・モデル》では「意思・合意」、《ドイツ・モデル》では「言語や文化の共通性」によって統合されることになる。そして、《フランス・モデル》では、共同体の入り口での選別は緩やかであるが、内向きの統合政策は厳しく、公共の場での一体性や文化の平準化が強く求められるのに対し、《ドイツ・モデル》では、入り口段階では、人種や言語などによる厳しい選別が行われ、ややもすると排外主義的意識をもたらすことは否定できないが、内向きの統合政策はかえって緩やかである、という特徴をそれぞれ持っている。これらは、A.D.スミスのいう「市民的・領域的ネイション」「エスニック的・系譜的ネイション」にあたる¹⁰⁾。これらネイションの2類型から考えると、多元的な「移民の国」であるアメリカは《フランス・モデル》であり、アメリカは民主主義や人権という普遍的な価値への「意思・合意」を国民統合の原理とした。独立宣言と合衆国憲法により与えられた政治的権利、それに基づいた市民の責任の実践、それらによって移民はアメリカ人になり、そうした「意思と合意」によって政治共同体としてのアメリカ合衆国は形成されたのである。

17世紀、この地に移民してきた人々にとって、アメリカは「辺境」ではあるが、それは今まさに未開

から文明へと向かう人類進歩の先端としての「辺境」であり、そして何よりそれは理想の社会「丘の上の町」を建設すべく神から与えられた「聖地」であった。こうした「辺境」「聖地」のイメージに、明確な輪郭と実体的基盤とを与えたのが、独立戦争で掲げた独立宣言に表明された民主主義や人権という普遍的な価値と合衆国憲法に基づく新しい政治体制である。このように「聖地」は「理念」によって意味づけられ、アメリカの創世神話ができあがるのであるが、移民はどのようにアメリカ人になっていったらうか。F.J.ターナーは、「アメリカ史におけるフロンティアの意義」について、西部は人間と制度のアメリカ化の場であって、フロンティアこそが、アメリカがヨーロッパ文化の伝統や影響から離脱して真にアメリカ的な独自の制度、民主主義、国民性を創造するうえに決定的な役割をはたした、としている¹¹⁾。西へ西へと膨張を続けるアメリカには、フロンティアの向こうにフリーランドが絶えず存在した。フリーランドは、「丘の上の町」を建設すべく神から与えられた「聖地」であり、そこにおいて移民はアメリカ化されることになる。しかし、19世紀末フロンティアが消滅すると、「アメリカ人である」とことと「アメリカ人になる」ことは大きく変容することになる。ウッドロウ・ウィルソンは、「アメリカの理想」という講演で、アメリカの使命として、次のことをあげている¹²⁾が、それは「アメリカ人である」ことの変容をよく物語っている。

- ① 自由と自治の伝導者たるべき使命感
- ② 自由と自治の価値意識に基づく、他国の「内治」に対する判断と干渉
- ③ アメリカの理想がどれほど実現できているか、というアメリカ政治の自己批判

かくして「聖地アメリカ」の「偉大な理念」は、世界へ向けて積極的に伝導されることになる。またその一方で、さまざまな社会運動によって「アメリカ人になる」ことが、移民制限と並行しながら、推し進められることになる。このようにして、アメリカは、普遍的な価値を重視し、それを世界に実現しようとする国になったのである。

(3) アメリカの「愛国心」

T.ジェファーソンが使用して以来、アメリカの「愛国心」は、「合衆国に対する愛着と政治的共感」という意味で、「アメリカニズム」という言葉で呼ばれている。「アメリカニズム」は、民主主義と人権という普遍的な価値を重視し、それを世界に実現しようというアメリカという国を支持し、それを誇りに思うアメリカ国民の感情の現れ、というこ

とができる。そうした集団的意識は、「移民の国」であるアメリカの歴史の中で、神から与えられた理想の「聖地」アメリカという意識が、独立宣言や合衆国憲法に規定された民主主義や人権という普遍的な価値によって意味づけられ形成されたものである。つまり、「アメリカニズム」は、一種の神国意識に基づく憲法愛国主義とすることができる。

一般に、ナショナリズムは、「自生的なものと想定されている生活様式によって自己の共同体を他者から分かつ、特殊主義の一形式」であり、その「特殊主義は普遍主義をこそ基底に据えている」ととらえられている¹³⁾。こうした《特殊主義》《普遍主義》を道具的に用いて「アメリカニズム」の構造を説明すると、「アメリカニズム」は神から与えられた「聖地」であるという《特殊主義》が、民主主義や人権の普遍的な「偉大な理念」という《普遍主義》と結びついて成立したものであり、《特殊主義》は《普遍主義》によって正当化され駆動される、と説明することができる。さらに、《特殊主義》は《普遍主義》によって根拠づけられるという形をとっているが、実はそれはアメリカ国民の愛国の根拠ではなく、アメリカ国民が民主主義や人権を普遍的価値として重視しているということを示しているに過ぎない。つまり、「理念」とそれを掲げる国とを重ね合わせ、「理念」への支持を国への忠誠へとずらしていくという憲法愛国主義の論法を確認することができる。

では、なぜ人の心にそうした感情が生まれるのであろうか。管見の限りであるが、「愛国心」形成の理由について、直截に論じたものは見当たらない。しかし、A.D.スミスは、「ナショナル・アイデンティティの基本的な機能」ないし「ナショナリズムが持続性、多様性、弾力性をもっている基本的な理由」について、次の①～③を指摘している¹⁴⁾。

- ① 子孫を通じて忘却をのりこえること。
- ② 黄金時代への訴えかけをつうじて集団的尊厳を回復すること。
- ③ 共同体の、いま生きている者と死者や戦没者とを結びつける、象徴・儀式・式典をつうじて同胞愛を実現すること。

スミスは、①について「個人的な忘却という問題に対して、満足のいく回答を与えてくれること」が、ナショナル・アイデンティティの最大の機能であるとし、「この世では『ネイション』にアイデンティティを抱くことが、死という結末をのりこえ、個人の不死への手段を確保するのに最も確実な方法なのである」と説明している。忘れ去られることへの不安や死への恐怖が、共同体やネイションへの帰属

意識を強めるのであり、それから逃れたいがために「愛国心」が生まれる、そして、「愛国心」によって忘却の不安や死への恐怖を克服することができる、というわけである。

また、②については「ネイションにアイデンティティを抱くということは、…ネイションの再生によって、個人の回復と尊厳が与えられるということである」といっている。栄光の過去と結びついたネイションの再生や尊厳によって、個人も自らの回復や尊厳を得ることができる。ここに、ナショナル・ヒストリーが大きな役割を果たすことになる。ナショナル・ヒストリーが真実かどうかは問題ではなく、ネイションの復活と尊厳にいかに関与し、人々の琴線の奥深くまで触れることができるかが重要となる。そうして創出されたナショナル・ヒストリーに入り直すことによって、個人は自らのアイデンティティを見出し、尊厳や回復を得るのである。

さらに、③については、スミスは、「パレード、追悼式典、記念式典、戦没者記念碑、宣誓、貨幣、旗、英雄への称賛、歴史的出来事の記録などによって、アイデンティティと統一性の再確認をとおり、同胞たる市民に、文化的紐帯と政治的類縁性を思い出させる」ことで、ネイションに対する愛の理想は実現する、と説明している。儀式や象徴は、個人のナショナル・アイデンティティの感覚に大きな影響を及ぼすものであり、「愛国心」は、そうした儀式や象徴によって、人々の間に同胞としての絆を再生させるのである。

スミスのこれらの指摘は、「愛国心」の機能とそれが喚起される理由に、貴重な示唆を与えている。①～③を手がかりに、「愛国心」の機能及びそれが喚起される理由を、次のa～cのように言い換えることができる。

- a 忘却の不安や死への恐怖を克服する。
- b 個人の尊厳や回復を得る。
- c 同胞としての絆を形成する。

なぜ「愛国心」は人の心に生まれるのか—「愛国心」にはこのような機能があるからである。これらa～cから、「愛国心」にはいわば「癒し」の機能があることがわかる。ある種の不安と空虚を抱き、「癒し」を求めて、「愛国心」は生まれるのである。それは個人の自然的な感情であるが、儀式や象徴によって同胞愛が喚起され、集団的なものとなる。

V 小単元「アメリカの『愛国心』」授業試案

1. 小単元の構成（3時間）（小単元の各パートは、小単元の目標・学習内容の(1)～(3)に対応している。）

- パート(1)：国際社会におけるアメリカの役割とアメリカ外交の基本原則
- パート(2)：「理念」を掲げる「移民の国」アメリカ
- パート(3)：アメリカの「愛国心」

2. 小単元の目標

- (1) 地域紛争に対する国際社会の対応から、国際秩序を維持するシステムを読み取り、国際社会におけるアメリカの役割とアメリカ外交の原則を解明する。
- (2) 「移民の国」アメリカの国家統合の原理を、ドイツ、フランス・モデルと比較しながら解明し、その歴史的由来をたどる。
- (3) 「アメリカニズム」の構造を解明し、「愛国心」の構造と機能について考察し、所々に見られる愛国的現象を説明できるようにする。

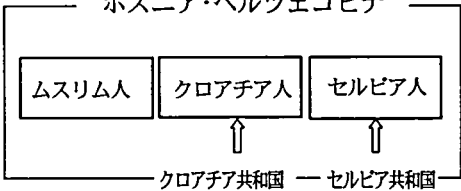
3. 学習内容

- (1) ① 現代の国際社会では、民主主義と人権は何ものにも優先する世界の普遍的な価値として認識されるようになっており、公共性を実現する様々な世界システムの制度や手段によって正当化された人道的介入が、アメリカを中心に行われている。
- ② アメリカは、国益(狭義)、世界(他国)の利益、人道の3つを外交の基本原則とし、これらが現実主義と理想主義、単独主義と多国間主義の間で融合され、アメリカの外交政策が決定され実行に移されている。
- ③ アメリカは民主主義や人権という普遍的な価値を重要視し、それを世界に実現しようとする国であり、国民はそれを支持している。
- (2) ① さまざまな民族や人種によって構成される「移民の国」アメリカは、「言語や文化の共通性」ではなく、「普遍的な理念への意思と合意」によって国民を統合しようとする「理念の国」であり、そのため、民主主義や人権という普遍的な価値が重視される。
- ② アメリカは理想社会を建設すべく神から与えられた「聖地」であり、その建設がアメリカ人の使命であるというイメージに、独立革命の原理として登場した民主主義や人権という普遍的な価値が意味づけられ、アメリカの国家創世神話ができた。
- ③ 開かれた「理念の国」アメリカにも、人種主義や排外主義による選別の排除構造が内在していたが、移民は国土の膨張によって再生産された「聖地」でアメリカ化され、フロンティアが消滅すると新しい「アメリカの理想」が打ち出された。
- (3) ① アメリカニズムは、一種の神国意識に基づく憲法愛国心であり、自国を特殊なものとして誇る特殊主義は合衆国憲法の普遍主義によって根拠づけられ駆動される。
- ② アメリカニズムは、普遍的価値とそれを掲げる国とを重ね合わせ、普遍的価値への支持を国への忠誠へとずらして成立している。
- ③ 「愛国心」には「癒し」の機能があり、「癒し」を求めて生まれる「愛国心」は自然的な個人の感情であるが、「愛国心」は儀式や象徴によって人為的に喚起され集团的意識となる。

4. 小単元の展開（3時間）

【1時間目】「国際社会におけるアメリカの役割とアメリカ外交の基本原則」

	発問	教授・学習過程	資料	生徒から引き出したい知識
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○ ソ連崩壊後、世界に平和は到来したのだろうか。 ・ ソ連崩壊後に起こった地域紛争をあげてみよう。 ・ 平和が到来したと言えるだろうか。 ○ ソ連崩壊後の世界秩序は、どのような方法で維持されているのだろうか。 ● なぜ、アメリカは介入するのだろうか。 ○ 旧ユーゴスラビアに起こった紛争を事例に見ていこう。 	<ul style="list-style-type: none"> T:発問する。 T:発問する。 P:答える。 T:発問する。 P:答える。 T:発問する。 P:答える。 T:発問する。 P:答える。 T:学習課題を提示する。 P:考える。 T:説明する。 T:学習手順を確認する。 P:確認する。 		<ul style="list-style-type: none"> ○ ボスニア、コソボ、ルアンダ、ソマリア、… ○ アメリカーソ連の大きな対立は終わったが、各地で地域紛争が起こっており、平和が到来したとはいえない。 ○ アメリカが介入して解決がはかられている。 ○ 唯一の超大国として、世界の警察部隊の役割を果たそうとしているのではないか。 ○ それぞれの地域紛争を調べてみないとわからない。
展開1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 旧ユーゴスラビアは、どういう国だったか。 ・ なぜ、旧ユーゴスラビアは解体したのか。 	<ul style="list-style-type: none"> T:資料を提示し、説明する。 P:確認する。 T:説明する 	① ②	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3宗教、5民族を抱える6共和国・2自治州の連邦国家で、チトーを中心に各共和国の均衡がはかられ、連邦は維持されていた。 ○ チトーの死後、求心力を失ったユーゴでは、

	<p>P:確認する。</p> <p>T:資料を提示し、発問する。 P:答える。 T:説明する。</p>	<p>1980年代経済危機が深刻化していたが、その打開の展望のない政治家たちが、民族主義を煽り国民の不満を逸らそうとしたため、各共和国で民族主義が台頭し、民族主義の政権が成立した。ミロシェビッチが登場したことにより、連邦のセルビア化の危機感と経済的理由から、比較的豊かな北部の共和国が、民族自決を掲げ連邦からの分離独立を求め、他の共和国や自治州も民族主義を高揚させて、これに続いた。</p> <p>① ②</p> <p>○ 民族構成が複雑な共和国ほど、分離独立は難しいのではないか。 ○ 分離独立によりセルビア人が少数派になる共和国や自治州で、セルビア人と他の民族の争いが起こり、紛争は深刻化した。(ボスニア、コソボ)</p>
<p>展開 2</p> <p>○ ボスニア紛争は、どのような対立から起こり、どのように展開したか。</p> <p>○ アメリカやNATOの介入は、内政干渉ではないのか。</p> <p>○ 内政不干渉の原則に優先する原理とは、何だろうか。</p> <p>○ アメリカやNATOは、なぜ介入したのだろうか。</p> <p>・ 国益のないアメリカは、なぜ介入したのだろうか。</p> <p>・ ベーカー長官の助言は、何を暗示していると言えるだろうか。</p> <p>・ それはどういう意味だろうか。</p> <p>・ この助言に対して、ボスニア政府はどうしたか。</p> <p>・ どんな方法で世論を盛り上げようとしたのだろうか。</p>	<p>T:モデル図を提示し、説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:考えさせる。 P:考える。 T:説明する。</p> <p>T:考えさせる P:考える。 T:発問する。 P:答える。 T:資料を提示し、説明する。</p> <p>T:資料を提示し、発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。 T:資料を提示し、答えさせる。 P:答える。</p> <p>③ ④ ⑤</p>	<p>ボスニア・ヘルツェゴビナ</p>  <p>○ 分離独立を求めるムスリム人・クロアチア人に対し、セルビア人が反対して衝突が起き、セルビア色を強めた連邦軍がセルビア人保護の立場から介入した。</p> <p>○ 他の共和国からの支援のないムスリム人のボスニア政府は窮地に陥ったが、アメリカが本格的介入し、NATOの軍事力発動によって挽回し、その下で和平合意が成立した。</p> <p>○ …… ○ 内政不干渉の原則に優先する原理があったのではないか。 ○ …… ○ 何か国益にかかわっていたからではないか。 ○ ソ連崩壊後、ユーゴにはアメリカの国益はなかったが、ヨーロッパ諸国には同じヨーロッパ内の問題として利害があった。</p> <p>○ ボスニアのシライジッチ外相の協力要請は成功しなかったが、米国防務長官ペーカーはメディアを使い世論を味方につけることを助言した。</p> <p>○ 世論の支持があれば、ボスニアを支持した介入もあり得るということを示唆している。</p> <p>○ 世論の支持が形成できれば、唯一の超大国として世界(他国)の利益のために行動するということではないだろうか。</p> <p>○ 世界(他国)の利益ということもアメリカの外交原則の一つである。</p> <p>○ PR企業と契約し、ボスニア支持の世論を盛り上げる工作を始めた。</p> <p>○ セルビアの行為をホロコーストやナチを連想させる「民族浄化」「強制収容所」などのキャッチ・コピーで伝え、セルビア=悪玉の世論を盛り上げた。</p>

<p>・ なぜ、こうしたプロパガンダが成功したのだろうか。</p> <p>○ 内政不干渉の原則に優先する原理とは、何だろうか。</p> <p>○ 人権の名のもとであれば、何でも他国に干渉してよいのだろうか。何だろうか。</p> <p>・ アメリカは介入にあたって、どんな手続きを取ったか。</p> <p>・ 介入の公共性は、どのように実現されているだろうか。</p>	<p>T: 資料を提示し、説明する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 考えさせる。 P: 考える。 T: 説明する。 P: 確認する。 T: 発問する。 P: 答える。</p>	<p>⑥ ○ 「敵の指導者は悪魔のような人間だ」「敵は残虐行為を行っている」「我々は正義のために戦う」という常套的な戦争プロパガンダを、ボスニア紛争でも確認することができる</p> <p>○ アメリカは民主主義や人権という普遍的な価値を大切にする国であり、人々はそれらの侵害ということに敏感で、そうした世論が政府を動かした。</p> <p>○ 民主主義や人権が世界の普遍的な価値として、優先されている。</p> <p>○ 国連安全保障理事会の決議を受けながら、単独ではなくNATOという多国籍軍の形で介入した。</p> <p>○ 国連安全保障理事会の決議に基づく行為ということで正当化され、公共性は実現されている。</p>
<p>展開 3</p> <p>○ コソボ紛争は、どのような対立から起こり、どのように展開したか。</p> <p>○ アメリカは、どのようにコソボ紛争に介入したか。</p> <p>・ このことから、アメリカはどのような基準で介入したといえるか。</p> <p>・ アメリカのコソボ介入は、ボスニアと同様に、国連安全保障理事会の決議を経ていたのか。</p> <p>・ それはどのような方法か。</p> <p>○ アメリカのコソボ介入について、どんなことがいえるか。</p> <p>終結 ○ ソ連崩壊後の世界秩序は、どのような方法・考え方で維持されているのだろうか。</p> <p>○ 人道的介入の中心となっているアメリカ外交原則について、どのようなことがいえるだろうか。</p>	<p>T: モデル図を提示し、説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 説明する。</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 説明する。 P: 確認する。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。 T: 説明する。</p>	<div data-bbox="991 748 1445 920" data-label="Diagram"> </div> <p>○ セルビア人の父祖の地であるコソボ自治州の政治は、多数派であるアルバニア人が握っていたが、自治州としての地位を剥奪され、セルビア民族主義が高揚する中で危機感を深めたアルバニア人は、セルビア共和国政府と対立し、共和国からの独立を宣言した。</p> <p>○ 武力闘争を唱えるコソボ解放軍の活動が活発化すると、紛争は一層深刻化したが、セルビアの軍事行動を制止するため、NATO軍の空爆が行われ、和平に至った。</p> <p>○ 停戦の仲介に入り一旦合意が成立したが、戦闘が再燃し、セルビアによる「民族浄化」が起こると、NATO軍によるセルビア空爆を行った。</p> <p>○ コソボでも、普遍的な価値を基準とし、セルビアのアルバニア人に対する民族浄化に対して人道的介入を行った。</p> <p>○ 国連安全保障理事会の決議は得ていないが、それに代わる方法で、介入の正当化と公共性の実現をはかろうとした。</p> <p>○ NATOの全会一致での決定、セルビア大統領ミロシェビッチが旧ユーゴスラビア国際刑事裁判所に告発されたこと、G8がミロシェビッチとの交渉にあたったこと、紛争終結後の平和達成活動は国連が関与していること。</p> <p>○ ボスニアと同様の介入理由、介入の正当化と公共性の実現の方法がうかがえる。</p> <p>○ 人権侵害は許容しないという認識が普遍化しつつあり、公共性を実現する様々な制度や手段によって正当化された人道的介入が、アメリカを中心に行われている。</p> <p>○ 国益、世界(他国)の利益、人道的利益を外交原則としている。</p> <p>○ 三原則は、現実主義と理想主義、単独主義と多国間主義の間で融合されて、政策が決定され実行されていく。</p>

<p>○ そのような外交原則に基づき人道的介入を行うアメリカについて、どんなことがわかるか。</p>	<p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p>	<p>○ アメリカは民主主義や人権という普遍的な価値を重要視し、それを世界に実現しようとする国である。</p> <p>○ そして、アメリカ国民はそれを支持している。</p>
<p>○ 今まで学習したソ連崩壊後の世界秩序の維持の方法や考え方、アメリカ外交の基本原則を、イラク戦争にあてはめて調べてみよう。</p>	<p>T:追究する学習課題を提示する。 P:学習課題を確認し、調べる。</p>	

【2時間目】「『理念』を掲げる『移民の国』アメリカ」

<p>導入</p>	<p>● なぜ、アメリカは、民主主義や人権を普遍的な価値として重視し、それを世界に実現しようとするのだろうか。</p> <p>○ アメリカとは、どんな国なのだろうか。その性格はどのように形成されたのだろうか。</p>	<p>T:新しい学習課題を提示する。 P:考える。 T:説明する。</p> <p>T:具体的な学習課題と手順を確認させる。 P:確認する。</p>	<p>○ どのような価値を重視するかということは、その国の性格にかかわることであり、アメリカという国の性格とその由来を辿ってみなければわからない。</p>
<p>展開 1</p>	<p>○ アメリカはどんな国だろうか。</p> <p>・ そのような様々な人種・民族の移民の人々を、どうして一つの国民としてまとめることができたのだろうか。</p> <p>○ 国民を一つにまとめるやり方には、どのようなものがあるのだろうか。</p> <p>・ それぞれのモデルでは、どういう特徴があるだろうか。</p> <p>○ 複雑な人種・民族構成のアメリカの国民統合のし方は、どちらのモデルといえるだろうか。</p> <p>・ それは本当だろうか。</p> <p>○ アメリカで、民主主義や人権という普遍的な価値が、国民的理念として現れるのはいつ頃だろうか。</p> <p>・ 独立以前、アメリカに移民して来た人々は、アメリカをどのようにとらえていただろうか。</p>	<p>T:発問する。 P:答える。 T:資料を提示し、考えさせる。 P:答える。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:資料を提示し、確認させる。 P:答える。</p> <p>T:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:資料を提示し、発問する。</p>	<p>○ (いろいろな答え)</p> <p>○ 多様な人種・民族からなる「移民の国」である。</p> <p>○ ……</p> <p>○ 言語や文化などの何らかの「共通性」に基づくドイツのようなやり方と、普遍的な価値への「意思・合意」に基づくフランスのようなやり方がある。</p> <p>○ ドイツ・モデルでは、入り口の選別は厳しい反面、成員に対する同化政策は必要ない。フランス・モデルでは、入り口での選別は緩やかであるが、成員には公共空間での一体化・文化の平準化が求められる。</p> <p>○ アメリカは「共通性」による統合はできないから、フランス・モデルではないだろうか。</p> <p>○ アメリカ国民は、「アメリカとは自由を敬愛する理念である」と自覚している。</p> <p>○ アメリカは、複雑な人種・民族からなる移民の国であるが故に、開かれた普遍的な価値への「意思や合意」によってその統合をはかろうとする「理念国家」であった。普遍的な価値を重視するのはそのためである。</p> <p>○ 独立宣言によってイギリスからの独立革命を正当化する原理として打ち出された。</p> <p>○ 独立戦争は、民族独立ではなく同じエスニシティに属するイギリスからの自立を求める戦いであった。それ故、イギリスからの独立を正当化する原理を普遍的な価値に求めた。</p>

		<p>P:答える。</p> <p>T:説明する。</p>	<p>○ アメリカは、理想の社会「丘の上の町」を建設するべく神から与えられた「聖地」であり、その夢を実現することが、神が自分たちに与えた使命であると考えた。</p> <p>○ 今でも、ジョン・ウィンズロップの言葉は歴史の授業や日曜学校で聞かされる言葉であり、レーガン元大統領はこの言葉で、アメリカの理想を呼び起こした。</p>
展開 2	<p>○ アメリカも、フランス・モデルのような特徴を持つのだろうか。</p> <p>○ 入り口での選別は、どうだったのだろうか。</p> <p>・ なぜ、先住民や黒人奴隷は「アメリカ人」から選別されたのだろうか。</p> <p>・ 新来の移民の場合は、どうだろうか。</p> <p>・ アメリカは西へ西へと国土を広げるが、新来の移民を排除してこの西部開拓を進めることができるだろうか。</p> <p>・ アメリカの入り口での選別について、どういふことがいえるだろうか。</p> <p>○ 移民に対するアメリカ化は、どうだろうか。</p> <p>・ どのように行われたのだろうか。</p> <p>・ 国土の拡大が終わり、フロンティアが消滅したら、どうなるのだろうか。</p> <p>・ そのようなアメリカ化の行き詰まりとアメリカの危機に対して、どう対応したのだろうか。</p> <p>・ ウィルソンの「アメリカの理想」は何を意味しているか。</p> <p>・ 新来の移民の受け入れは、20世紀にはどうなったのだろうか。</p>	<p>T:学習課題を提示し、学習手順を確認する。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:考えさせる P:考える。 T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:資料を提示し、発問する。 P:答える。 T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:資料を提示し、説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:考えさせる。 P:考える。 T:資料を提示し、説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p>	<p>○ 入り口での緩やかな選別、成員に対する厳しい同化政策。</p> <p>○ 先住民や黒人奴隷の存在を考えると、入り口での選別は確実にあったといえる。</p> <p>○ 先住民は土地の獲得、黒人奴隷は労働力の確保のため、「アメリカ人」から排除された。</p> <p>○ 新来の移民は、「理念」の担い手として期待される反面、「非アメリカ的」世界からの侵入者として警戒され、「理念の国」アメリカを守るためには排外主義は不可避であった。</p> <p>○ 西部開拓を担う労働力を確保できない。</p> <p>○ その時々アメリカの社会経済的状況、移民の数や出身国などによって、排外主義は働いたり働かなかったりしたが、それが国民的意識となることはなかった。</p> <p>○ 「理念」を掲げる開かれた「移民の国」ではあったが、入り口では人種主義による排除が行われ、排外主義の排除構造も内在していたが、それが国民的意識となることはなく、移民が受け入れられた。</p> <p>○ 移民のアメリカ化が絶えず行われなければ、「移民の国」は維持できない。</p> <p>○ 西へ西への国土の膨張によって、「理念」により意味づけされた「聖地」としての「丘の上の町」が再生産され、新来の移民はそこでアメリカ化した。</p> <p>○ 「理念」を掲げる「移民の国」アメリカは、自由の土地の存在によって支えられていたといえる。</p> <p>○ アメリカ化は行き詰まり、「理念」を掲げる「移民の国」アメリカは危機をむかえる。</p> <p>○ 20世紀初頭、「自治と自由の伝導者としての使命感」「アメリカの価値意識に基づく他国の内地に対する判断と干渉」「アメリカ政治に対する自己批判」とう新しい「アメリカの理想」が、ウィルソンによって打ち出された。</p> <p>○ 世界におけるアメリカの役割を定義し、アメリカ的価値観の再構成とアメリカ化の推進を提起したものである。</p> <p>○ アメリカが世界に普遍的な価値の実現しようとするのは、ウィルソンの「アメリカの理想」によるものである。</p> <p>○ 19世紀末からの空前の規模の移民に対し、1920年代、人種・民族的な移民制限法が成立し、原国籍割り当て制度による移民制限が、1965年に形式的平等主義と優先順位制度が打ち出されるまで続いた。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> 20世紀のアメリカ化は、どのように進められたか。 ○ アメリカは、フランス・モデルのような特徴を持っていたか。 	<p>T:説明する。 P:確認する。 T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 移民が制限される一方、アメリカ化を目的とする様々な社会運動が展開された。 ○ フランス・モデルの特徴とは、必ずしも同じとはいえない。 ○ アメリカの移民政策は、「労働力需要」「人種民族的な差別感情」「民主主義と人権の理想」の3つを勘案しながら排除と同化が進められ、「民主主義と人権の理想」へ向かって来た。
終結	<ul style="list-style-type: none"> ○ なぜ、アメリカは、民主主義や人権を普遍的な価値として重視するのだろうか。 ○ なぜ、アメリカは、民主主義や人権を世界に実現しようとするのだろうか。 	<p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 民主主義や人権の重視は「移民の国」アメリカの国家創世神話に由来するものであり、それによって「移民の国」アメリカは「理念の国」として統合することができた。 ○ プロンティアこそが「聖地」であり、移民はそこにおいてアメリカ化した。フロンティアが消滅すると、新しい「アメリカの理想」が打ち出され、国際主義・介入主義の対外政策を採るようになった。

【3時間目】「アメリカの『愛国心』」

導入	<ul style="list-style-type: none"> これまで学習して来たことを確認してみよう。 アメリカ国民のアメリカという国に対する支持は、国民のどのような心情の現れといえることができるだろうか。 ● 「アメリカニズム」には、どんな特徴があるのだろうか。 	<p>T:確認させる。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:学習課題を提示し、確認させる。 P:確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ アメリカは、民主主義や人権を普遍的な価値として重視し、それを世界に実現しようとする国である。 ○ そのことは、当然、アメリカ国民がそれを支持しているということの意味している。 ○ アメリカ国民の「愛国心」の現れといえることができる。 ○ 1797年、T.ジェファーソンが使用して以来、それを意味するものとして、「アメリカニズム」という言葉が使われている。
展開1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 次の資料を通して、「アメリカニズム」について、考えて行こう。 国家に対する忠誠は、どのように表現されているか。 ○ 「神の導き」という言葉は、何を意味しているのだろうか。 アメリカ国民は、自国をどのように考えているのだろうか。 なぜ、特別の場所と考えるのだろうか。アメリカ建国にさかのぼって考えてみよう。 「神の導き」という言葉は、何を意味しているのだろうか。 	<p>T:資料を提示し、学習手順を確認させる。 P:確認する。 T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:考えさせる。 P:考える。 T:資料を提示し、発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p>	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「神の導きのもと」「すべての人々の自由と正義を称える共和国とアメリカ合衆国旗に対して」と表現されている。 ○ アメリカ国民は、「アメリカ」という言葉に何か崇高な意味を込めて使っている。 ○ アメリカ国民には「アメリカは特別な国」である、という意識がある。 ○ アメリカは、理想の社会「丘の上の町」を建設すべく神から与えられた「聖地」であると考えていた。 ○ アメリカ国民は、アメリカは神から与えられた「聖地」である、という意味で、自国は特別な国であると考えた。 ○ アメリカは神から与えられた特別な「聖地」であるということの意味しており、アメリカニズムには一種の神国意識があることが分かる。 <p>②</p>

	<ul style="list-style-type: none"> これらのことから、「アメリカニズム」について、どういうことがいえるだろうか。 	<p>T:説明する。 P:確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一種の神国意識に基づく、自国を他国から区別しようとする特殊主義ということができる。
展開 2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「自国は特別なんだ」という理由だけで、他国へ介入できるだろうか。 その他に、何が必要なのだろうか。 「すべての人々の自由と正義を称える共和国」とは、どういうことなのだろうか。 「特別である」とことと普遍的な価値は、どのような関係にあるか。 	<p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「特別だから」という理由だけでは、傲慢であるという批判を受けることになり、支持を得ることはできない。 ○ 「特別である」ことを根拠づけるものが必要である。 ○ アメリカは、民主主義や人権を重視する国であるということであり、独立宣言と合衆国憲法によって規定されている。 ○ アメリカは普遍的な価値の擁護者であるということの意味しており、アメリカニズムは憲法愛国心であるといえる。 ○ 普遍的価値は「特別である」ことと理由を説明するものである。 ○ アメリカニズムの特殊主義は、普遍に訴えかけて正当化がはかられているといえる。
展開 3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 普遍主義と特殊主義は、そうした関係だけだろうか。 高揚するアメリカニズムの熱情によって普遍主義はどうなったか。 反テロ愛国法とはどんな法律か。 反テロ愛国法は、民主主義や人権に抵触しないだろうか。 なぜ、そのようなことになってしまったのだろうか。 アメリカ国民が重視し愛しているものは、国なのか、それとも民主主義や人権なのか。 ○ 以上のことをまとめると、「アメリカニズム」について、どういうことがいえるだろうか。 	<p>T:考えさせる。 P:考える。</p> <p>T:資料を提示し、発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:考えさせる。 P:考える。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:まとめさせる。 P:まとめる。</p> <p>T:説明する。</p>	③ <ul style="list-style-type: none"> ○ アメリカニズムの高揚は、反テロ愛国法を生み出した。 ○ 司法長官の判断で国内のあらゆる団体をテロ組織として認定したり、米国籍を持たない不審な外国人無期限拘留ができ、当局の秘密の取り調べや調査権限の拡大、FBIによる監視活動の権限拡大。 ○ 民主主義や人権に抵触する法律であり、反対している人々もいる。 ○ 市民的自由を侵害する恐れがある法律であり、高揚したアメリカニズムは、その根拠たる普遍主義を否定することになってしまった。 ○ 民主主義や人権のはずである。 ○ アメリカニズムは、普遍的な価値とそれを掲げる国とを重ね合わせ、普遍的な価値への支持を国への忠誠へとずらししたものである。 ○ 「アメリカニズム」には特殊主義の様相を確認することができるが、それは普遍主義によって根拠づけられ、駆動される。 ○ 「アメリカニズム」は、普遍主義によって根拠づけられて駆動し、特殊主義として現象しているということができるが、それは普遍的な価値への支持を国への忠誠へとすりかえるものである。
展開 4	<ul style="list-style-type: none"> ○ なぜ、「愛国心」は生まれるのだろうか。 記念碑はどういう役割を果たしているだろうか。 	<p>T:考えさせる。 P:考える。</p> <p>T:資料を提示し、発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p>	④ <ul style="list-style-type: none"> ○ テロに対して勇気ある行動をした人々を記憶し、その愛国心を伝える役割を果たしている。 ○ 慰霊碑は、アメリカ国民を同胞として結びつけ、勇気ある人々の模範から自己犠牲の精神を引き出し、同様の行為を鼓舞する。

	<ul style="list-style-type: none"> アメリカニズムの形成において、同じような働きをしているものはないだろうか。 これらのことから、どういうことがいえるだろうか。 ○ 愛国心は人為的に形成されるだけなのだろうか。 ある学者は、どのようにいっているか。 初めて移民としてアメリカに渡った人々は、どういう気持ちだっただろうか。 	<p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。 T:考えさせる。 P:考える。 T:資料を提起し、発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p>	<p>○ 星条旗への忠誠の誓い。 ○ 様々な儀式や象徴がそうした働きをしている。 ○ 愛国心は、儀式や象徴によって人為的に喚起され集団的な同胞意識となる。</p> <p>○ 死への不安や忘却を克服し、個人の尊厳を回復することができるかといっている。 ○ 愛国心には、何らかの不安感や空疎感に対して、癒しを求める人の自然的な感情という面もある。 ○ 不安感や空疎感と戦いながら理想の社会「丘の上町」の建設を目指したことは、十分想像できる。</p>
終結	<ul style="list-style-type: none"> ○ アメリカニズムの構造について、まとめてみよう。 ○ 愛国心はどのように形成されるのだろうか。 愛国心が癒しを求める感情ということについて、どういう実感をもつか。 ○ 普遍主義と特殊主義という枠組みを使いほかの国の愛国心を説明して見よう。 	<p>T:まとめさせる。 P:まとめる。</p> <p>T:まとめさせる。 P:まとめる。</p> <p>T:考えさせる。 P:考える。</p> <p>T:学習課題を指示する。</p>	<p>○ 「アメリカニズム」は、普遍主義によって根拠づけられて駆動し、特殊主義として現象しているといえることができるが、それは普遍的な価値への支持を国への忠誠へとすりかえたものである。</p> <p>○ 愛国心は癒しを求める自然的な感情として芽生えるが、儀式や象徴によって人為的に集団的意識として喚起される。</p>

5. 教授資料とその出典

【1時間目】

- ① 《地図「モザイクの国ユーゴ」》…『世界民族問題事典』平凡社、1995年、p.1171より
- ② 《表「ユーゴ諸国の現況」》…柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』岩波新書、1996年、xii～xiiiより
- ③ 《アメリカの国益とユーゴ》…高木徹『ドキュメント戦争広告代理店—情報操作とボスニア紛争—』講談社、2002年、p.91より
- ④ 《ベーカー国務長官の助言》…前掲③、p.23より
- ⑤ 《「民族浄化」強制収容所のキャッチ・フレーズ》…前掲③、p.95、p.170
- ⑥ 《戦争プロパガンダの常套句》…アンヌ・モレリ著、永田千奈訳『戦争プロパガンダ10の法則』草思社、2002年、目次より

【2時間目】

- ① 《「移民の国」アメリカ》…松尾式之『民族から読み解く「アメリカ」』講談社、2000年、p.48より
- ② 《「アメリカとは理念である」》…円道まさみ『アメリカってどんな国？』新日本出版社、2003年、p.1より
- ③ 《ジョン・ウィスロップの「丘の上の町」》…植田信「アメリカ大統領選挙と日本(中)」(『月曜評論』2000年11月号)等より筆者作成
- ④ 《アメリカの領土膨張》…野村達朗『世界史リブレット32 大陸国家アメリカの展開』山川出版、1996年、p.6より
- ⑤ 《ウィルソンの「アメリカの理想」》…古矢旬『アメリカニズム—「普遍国家」のナショナリズム—』東京大学出版会、2003年、pp.23-25より筆者作成

【3時間目】

- ① 《星条旗への忠誠の誓い》…円道まさみ『アメリカってどんな国？』新日本出版社、2003年、p.128-30より
- ② 《「“The US”と“アメリカ”」》…前掲①、p.13
- ③ 《反テロ愛国法の成立》…朝日新聞(2001年10月28日朝刊)より
- ④ 《9.11の慰霊碑》…三浦俊章『ブッシュのアメリカ』岩波新書、2003年、p.45-47より
- ⑤ 《愛国心の機能》…A.D.スミス著、高柳先男訳『ナショナリズムの生命力』晶文社、1998年、pp.271-75より筆者作成

VI おわりに

筆者は、従前より、現代史学習について、「現在の認識」「過去の解明」「未来の展望」という三つの学習段階により、問題史的に授業を構成するのが望ましいと考えてきた。「世界史B」の終結部は、現代史の単元であり、その主題学習は99年版では「～を考察・展望させる」「認識を深めさせる」とされているが、それはこうした三つの学習段階により授業を構成することで実現できると考える。本稿で提示した授業試案も、こうした立場から開発したものである。

[註]

- 1) 拙稿「高等学校『世界史』の『主題を設定し追究する』学習(1)・(2)」(『中等教育研究紀要』第44巻, 広島大学附属福山中・高等学校, 2004年)
- 2) 現代史の特性と現代史学習の意義については、拙稿「現代史学習の授業構成—小単元『国民国家の形成とその行方』の場合—」(全国社会科教育学会『社会科研究』第50号, 1999年)を参考にされたい。
- 3) 《社会や世界の分断化》については、専門領域や問題関心、言い回しの違いはあるが、姜尚中、佐藤俊樹、荻谷剛、青木紀、山田昌弘などの論者が指摘している。
- 4) 拙稿「『多元主義』歴史授業の可能性—地域から歴史を考える—」(全国社会科教育学会, 『社会科研究』第58号, 2003年)では、このことを指摘して、多元主義と原理主義のパラダイムを提起し、多元主義の立場に立つ歴史授業を構想した。
- 5) アーネスト・ゲルナー著、加藤節監訳『民族とナショナリズム』岩波書店, 2000年, p. 230
- 6) 小単元の各パートの教材構成の視点や学習内容の設定に際しては、次の文献を参考にした。
 - ① 田中明彦「国家主権と国際正義」(『アステイオン』52号, 1999年)
 - ② 田中明彦『ワード・ポリティクス—グローバリゼーションの中の日本外交—』筑摩書房, 2000年
 - ③ ジョセフ・S. ナイ著、山岡洋一訳『アメリカへの警告—21世紀国際政治のパワー・ゲーム—』日本経済新聞社, 2002年
 - ④ 斎藤真ほか監修『アメリカを知る事典』平凡社, 1986年
 - ⑤ 大下尚一・有賀貞『新版 概説アメリカ史』有斐閣選書, 1990年
 - ⑥ R. N. ベラーら著、島菌進ほか訳『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ—』みすず書房, 1991年。
 - ⑦ 柏岡富英「『移民国家』の理想と現実」(梶田孝道『国際政治学』名古屋大学出版会, 1992年)
 - ⑧ 野村達朗『世界史リブレット32 大陸国家アメリカの展開』山川出版, 1996年
 - ⑨ 玉本偉「アメリカにおけるナショナリズムの現在」『思想』No. 863, 1996年5月
 - ⑩ 松本悠子「アメリカ人であること・アメリカ人になること」『思想』No. 884, 1998年
 - ⑪ 谷川稔『世界史リブレット35 国民国家とナショナリズム』山川出版, 1999年
 - ⑫ 古矢旬『アメリカニズム—普遍国家のナショナリズム—』東京大学出版会, 2002年
 - ⑬ 大澤真幸「ナショナリズム」(梅棹忠夫監修, 松本正毅代表編集『世界民族問題事典』平凡社, 1995年) pp. 818-27
 - ⑭ B. アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『想像の共同体』NTT出版株式会社, 1997年
 - ⑮ アンソニー・D. スミス著、高柳先男訳『ナショナリズムの生命力』晶文社, 1998年。
 - ⑯ マーサ・C. ヌスバウム他著、辰巳伸知・能川元一訳『国を愛するということ—愛国主義の限界をぐる論争—』人文書院, 2000年
 - ⑰ E. J. ホブズボーム著、浜林正夫訳『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店, 2001年
 - ⑱ 姜尚中『ナショナリズム』岩波書店, 2001年
 - ⑲ 小熊英二・上野陽子『〈癒し〉のナショナリズム』慶應義塾出版会, 2003年
 - ⑳ 川上勉「ナショナル・アイデンティティの2つの側面」(中谷猛ほか編『ナショナル・アイデンティティ論の現在』見洋書房, 2003年)
- 7) 前掲6)の①・②
- 8) 前掲6)の③, p. 278
- 9) 前掲6)の⑩, pp. 48-53
- 10) 前掲6)の⑮
- 11) 前掲6)の⑧, pp. 69-70
- 12) 前掲6)の⑫, pp. 23-25
- 13) 大澤真幸「ナショナリズム」, 梅棹忠夫監修, 松本正毅代表編集『世界民族問題事典』平凡社, 1995年, pp. 818-27
- 14) 前掲6)の⑮, pp. 271-75

(本稿で提示した授業試案は、全国社会科教育学会の2003年度研究大会の自由研究における、筆者の発表「現代史学習の教材開発—愛国心の教材化—」を加筆・修正したものである。)